

## 季節の養鶏管理について

岡山県養鶏試験場

11月に入ると農繁期になり中々多忙であり、鶏の管理が二次的になり易く飼養管理がややもすると粗漏になり勝ちであるから責任者をはっきり定めて鶏をよく観察し、飼養管理に万全を期し、鶏の能力を十分に発揮させる様に努めましょう。

鶏は野鶏より家禽化され鶏舎内に閉じ込められて自由を束縛されており、又一面体が小さく割に体表面積が大でありしかも生産性が高く、いわば精密機械であり、外界の感作に対する抵抗性の弱いのでありますから管理者は合理的に保護する様に適時適切な管理を行なう必要があります、之は管理者の義務であります。

11月からは愈々寒冷期に入り気温は急に下り降霜を見る様になります。今月は防寒と強制換羽の2項目について述べます。

(1) 防寒、鶏は体を羽毛に包まれており、汗腺が無いから暑さには弱いですが寒さには強いと一般に言われますが、これは程度問題でありまして産卵鶏の快適温度は摂氏12℃前後により25℃前後と言われておりますから寒さから守ってやる必要があります。特に通り抜けの寒風及び隙間風は想像以上に鶏体に悪影響を与え、奪い去られるエネルギーは大きいのであります。

鶏の防寒は換気が十分にできる状態において通り抜けの寒風、隙間風を避ける様にすべきであります。

平飼管理の場合はその土地の自然環境、鶏舎周囲の状況、鶏舎の構造、単位面積当りの収容羽数等により一概には言えないが、岡山県においては一般的に言って北側は一応閉じる事ができる構造にし、南側は開放でよろしい。(酷寒期には状況により南側も或程度考慮する必要がある場合もある。)そして日中は北風の強くない日はできるだけ北側も開放し通風を良くし、舎内の乾燥にも努め(湿度が高いと伝導による熱の放散が大きくなり、保温に不都合である。)日中の舎内温度が余り高くならぬ様にし、夜は北側を閉じて保温し(この為には北側の窓、はね上げ戸を開閉自在にして置く必要がある。)昼夜の気温差を少なくする必要があります。体格が小さく割に体表面積が大であり、生産性の高い鶏は日中の最高の温度と夜中の最低の

温度との差、即ち日較差が大きい事は悪影響を与えるのでありまして、鶏は摂氏10℃迄の日較差に対しては生理的に体温調節をし易いが、日較差が20℃前後に達すると悪影響を及ぼし減産、産卵中止に至ります。例えば平飼管理において日中南側も硝子戸或いはビニール布で閉じ温室の様になっているのを見ることがありますが、これは鶏を可愛がっている様で実は日較差の大であることと換気不良によつて鶏を苦しめているのであります。平飼管理の場合不合理に防寒にとらわれ過ぎると舎内を暗くし日当たり及び採光を悪くし特に換気不良になり易いから注意を要します。換気が悪いとループ、チフテリにかかるとよく言われるがその理由は、換気の悪い場合は酸素の不足、悪性ガスの多量により鶏の体の不調を来たし(人間の場合は体がだるく頭痛を呈し、食欲が減退する状態)そこへ寒風が襲って来ると体温調節が破れループにかかり易いのであります。一般に環境温度が低い場合は代謝が昂進し酸素の消費量は増加するのであるから換気には十分注意を要します。

次にバタリー管理の防寒であります。屋外の場合はその土地の自然環境、周囲の状況、バタリーの基数、設置の状況等により一概には言えないが、南部では風の強く当る処へ第1図の防風格子を設けるとよろしい。防風格子はバタリーより1m以上離し、若干高めにし風の渦巻が鶏体に当らぬ様にします。寒い土地で基数の少ない場合は北西側に藁、藎等でバタリーよりやや高めに1m以上離して防風垣を作ります。不合理に西北側を接近して全面的に囲んで防風設備をすればかえって悪影響を与えることがありますから注意を要します。特にバタリーの北側に直接飼料袋ビニール布等を張ることは日較差を大きくし、場合によっては換気不良の原因となり、有害有無であります。

次にケージ管理の防寒であります。諸種の条件により一概には言えないがケージ管理の場合は外界の感作を他の管理より一層受け易いのであります。一般には第1図の防風格子をケージより50cm以上離して庇にくっつけておくか屋根の上に少し出しておく様

## 岡山畜産便り1959.10

に設置すると風は渦巻を起さず屋根を越えます。この場合は防風格子をつけない場合に比べてその約30%に風速が減じ、防風の効果があります。尚第1図の防風格子は一例であって、原則的には板の幅と目の割合を2対1にすればよろしい。

防寒に関連して考えなければならぬことは鶏に耐寒性を与えておく事であります。即ち鶏を不合理に可愛がり過ぎて秋から冬にかけて鶏舎を囲み過ぎてその為に耐寒性を得ておらない鶏は寒さの感作を大きく受け易いので、寒さが強くなる前に寒さに対する鍛練は必要であります。平飼よりバター特にケージに移す時期が遅く寒さが強くなってから移すと寒さの影響が大きく、産卵が低下するからなるべく早く移す必要があります。

(2) 強制換羽 多産鶏は換羽が遅いか、又は無休産で産卵を続けるものでありますが、これをそのままにしておくとは換羽が遅く、産卵開始が種卵採取に間に合わぬか、又は春期孵化時に休産したり、又産卵を続けても卵殻が不良となり、受精率、孵化率が極めて不良となるものであります。でありますからこのような鶏に対しては強制換羽(人工的に鶏に換羽さす)を行うと換羽休産期間が短縮され、自然換羽で60日以上休産するものが平均45日位で産卵を開始し10数日短縮でき、又次年度の産卵率が向上し孵化成績が良好となります。

強制換羽の方法は次の通りであります。

- (一) 蛋白質の含有率を下げ減給餌する。
- (二) 点灯管理後急に消灯する。
- (三) 給水し乍ら5-7日間絶食する。
- (四) 2-3日間絶食、絶水する。

これら4方法の冒内(一)の方法では優秀鶏は換羽に移らず体力を消耗するに止る。

(二)の方法は一斉に休産し換羽に移るが点灯による疲労は次の換羽終了期間を若干長くする欠点がある。

(四)の方法は弱い鶏に影響が大きく著しく衰弱する。結局(三)の方法で実施するのが良いようであります。

(三)の方法で実施する場合は絶食中でも体内に貯蔵の栄養分を消費し乍ら生活し、2-4日で休産します。

(三)の場合に絶食の日数を体重に合せて長短を定め、即ち1.5kg以下の鶏は4日、2kg迄5日、2.3kg迄6日、それ以上鶏により7日と分類して実施すること

も施設等において可能であれば良い方法と思います。

強制換羽の時期一般には10月下旬より11月にかけてであります。

実施に当っては未換羽鶏のみを別飼にして行い、既に換羽に移って居る鶏及び雄鶏は必ず別にします。絶食期間中は飲水のみ与え、飼料は勿論のこと鶏糞、糞その他の物は全々食べられぬ様にし、又運動場への放飼は中止する必要があります。できればバタリー、ケージに收容して絶食し、絶食日数を鶏の個体により長短を定めるとよろしい。

絶食後の給餌は第1日目は蛋白質の若干低い飼料で粉碎し消化し易いものを控え目に緑餌と共に与え、3日目位より普通の飼料を与えてよろしい。

強制換羽は一般に種鶏に対して実施するのですが、鶏卵鶏においても卵価、施設等の諸状況を判断の上実施可能であれば軽い点灯を併せて行うと有利なことがあります。

第1図 防風格子

